

第1回 FD研究会 (2011年1月26日開催)

——入門ゼミ受講生の声に接して——

教授法開発室員 小野田 俊 藏

入門ゼミ受講生の率直な声を聞こうということで、5名の1回生に集まっていただいてインタビューを試みた。歴史学部、教育学部、社会学部と別々の学部には属している学生達であったが、ほぼ同じような受け止め方で入門ゼミを受講したようだ。異口同音で皆が語るの、入門ゼミが持つ友達作りの場としての意味合いである。サークルに所属した者を除いて、入学後に同じ学科に属する友達と一緒に受講するこの入門ゼミのクラスの持つ意味は大きい。

大学に入学した学生が最初に感じるのは高校時代の勉強と大学での学習の違いであろう。講義の受講時間割を自分で決めるという事も戸惑う点ではあるが、定まったクラス(ホームルーム)がないという事も大きな相違点である。研究課題が決まってくると指導の先生を中心に卒業論文(卒業研究)ゼミという帰るべき学内の巣が存在してくるが、新入生にとってそのような場はこの入門ゼミ以外にはない。新入生の立場からしてみれば入門ゼミは「ホーム」なのであって、担当教員はこのことを先ず強く意識しておく必要がある。学内ホームレスを作ってはいけない。これは大学としての責務であろう。大学は個人責任の訓練場ではあるが「助けてくれ」と言える環境は常に整えておかねばならない。

次に「入門」という言葉が示すように、「大学の勉強で必要とされる学習ツールの初めての体験が大きな経験となった」というのがインタビューに答えてくれた学生たちの共通した声であった。図書館や学科の資料室などにデヴューするにはそれなりに勇気が要るので、この入門ゼミでの体験は貴重である。その他、図書館のデータベース検索の方法や、SNSや縁(えにし)、あるいはe-learningなどの個人設定や機能説明はこの入門ゼミの要素としては必須と言える。

与えられたものを憶える勉強ではなく、問題点を自ら発掘してそれらに関する先行研究の有無を調べ、考察を加えるための資料の蒐集を進める、それらの為の手順と方法を初年次に訓練することは極めて重要なことであり、学生たちもその道具の入手とスキルの修得を入門ゼミに期待している。

グループ学習における研究課題の設定やグルーピングについてインタビューに答えてくれた学生たちの意見は、同席した我々教員たちに新鮮な刺激を与えた。予想に反して彼らの希望は、教員側からの一方的なグルーピングがよいと言うのである。多くの入門ゼミでは小さなグループに分かれて特定の課題を共同で考えることによって学習の手順や方法を模索しながら学習してもらおうとしているが、その際のグルーピングや課題のテーマ設定を、一方的に与えられるほうがよいと言うのである。学生たちはその課題研究を完全にシミュレーションと捉えているという事であろう。そこに好き嫌いを言わず、かつ一方的なグループ分けの方が友達作りにも、あるいは研究手順の修得にも有効だということを経験的に知っているのである。

考えてみれば我々教員の世代には有り得なかったツールで現代は満ちている。アナログ的発想が染み付いている我々には感覚的に理解困難な発想がたまにある。フェイスブックやツイッターにそれまで全く知らない人物が登場してきたり、特定のアーティストのアルバムを順番に聞くのではなく複数のアルバムの中の曲をシャッフルして聞く発想は、デジタル世代にはごく当然の事なのであろう。その意味で、グループ研究において「一方的にメンバーや課題が決められた」という感覚は彼らにはなく、むしろそれはアナログ的旧発想の産物なのかも知れない。インタビューした学生の皆は、一方的でいいから途中でシャッフルして欲しいと言うのである。新たな新鮮な出会いも発想もシャッフルの中にあると言う意味だが、それは確かに間違いではない。

入門ゼミにとって最も重要な要素の一つと考えられたのは「少人数制」ということであったが、この点に関して、ひとつのクラスの中で単一の話題が進行していなければならないという古典的な発想から自由になれるクラス運営の方法があれば、実人数はさほど問題にはならないかも知れない。個を結びつける要素が同時に複数存在し得るデジタル世代に学生たちはいる。そのような時代へ確実に突入しているのである。

